

【図書紹介】

ブレイディみかこ著 『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

(新潮社、2019年)

石黒 万里子

(東京成徳大学)

本書は、福岡県出身で英国に住む著者が、自身の息子の中等学校生活について描いたエッセイである。失礼ながら決して「アッパー」ではなく、むしろ「元底辺」と評される学校の様子が日本語で赤裸々に描かれており、著者の軽妙な文章表現が親しみやすく、しかし英国社会の現実の一端を垣間見られる好著である。

本書に限らずこの著者の魅力を端的に示せば、絶妙なバランス感覚だろう。著者は、教育学者でも英国研究者でもない。ブリティッシュロック好きが高じて高卒後アルバイト生活の後に英国に渡り、子どもができるまではあまり帰国していなかったという。したがって決していわゆる「エリート」ではない、むしろ徹底した「草の根」視点からの記述が続く。かといって文章を読み進めれば、知識や教養に基づいた深い洞察が印象的で、アカデミックにもきわめて刺激的である。

筆者はかつて、著者の『子どもたちの階級闘争——ブローケン・ブリテンの無料託児所から』（みすず書房、2017年）を読んだ。日本語による英国の教育事情のエッセイは多々あるが、英国の伝統的なパブリックスクールやオックスブリッジまたは「王室ネタ」とは異なる、徹底した「地べた感覚」が興味深く、学術書ではないながらも政治的文化的背景を踏まえた記述に引き込まれた。

そのうえで期待して手にとった本書は、やはりとても魅力的だった。一般的ないわゆる「海外での子育てエッセイ」とは一線を画し（それはそれで興味深い）、決して「英国の教育が優れているから日本も導入すべき」という英国自慢でもなければ、「日本の良さ再発見」でもない。英国でも日本でも当たり前であろう課題山積みの現実が、描きようによっては直視できない辛い状況も含め、著者特有の視点とユーモアで通読可能になっている。眼を背けたくなるような悲惨な現実があっても、それでもそこでは生き抜いているのであり、自分と他者のことを考えながら周囲と交渉しつつ生活をやりくりし続けている。本書は研究的な専門書ではない。しかし、社会的な問題意識を鮮やかに言語化してくれたことに、研究職のはしくれとして敬意を表したい。

本書を読み進める中で、英国で伝統的な「ドラマ」の授業やGCSEに向けた準備のエピソードなども大変興味深い、やはり印象的なのは、性的志向や人種民族、宗教やライフスタイルなどの圧倒的な多様性・階層性を備えた英国社会の描写だろう。第6章「プールサイドのあちら側とこちら側」で描かれる水泳競技会での私立学校と公立学校との違い、第9章「地雷だらけの多様性ワールド」で描かれるFGM（女性器切除）の授業とその影響、第11章「未来は君らの手の中」における性の多様性についての子どもたちの受けとめ方など、すぐに正解が出るはずがないなが

ら、課題と向き合おうとする（または向き合わざるをえない）子どもとその家族、教員や地域住民の姿がリアルに浮かび上がる。

また「日本人」では描きにくい、閉鎖的で画一的で排他的な日本の状況や、あくまで善意の表れであるはずの行為の「ありがた迷惑さ」が率直に描き出されているところも魅力である。第10章「母ちゃんの国にて」では、排斥的な日本人男性に加え、本人たちは好意であろう中学生くらいの子たちの「かわいい」や「ハーフ」という呼称について、評価され名づけられる側からの視点で描かれているところが興味深い。

本書を通して、印象的な指摘やフレーズが頻出する。第3章「正義は暴走しやがる」、第4章「アイデンティティは一つじゃない」「分断とは、そのどれか一つを他者の身にまともせ、自分の方が上にいるのだと思えるアイデンティティを選んで身にまとうときにおこるものなのかもしれない」、第6章「下層上等!」、第10章「ハーフ」という呼び方についての意見（「ダブル」も違和感、「みんな同じ『1』でいいじゃない）」「自分が属する世界や、自分が理解している世界が、少しでも揺らいだり、変わったりするのが嫌いな人なんだろう」などなど。第12章では、福祉に保護されて施設や里親のもとで育った人が、たとえ本当はそうでなくても、「自分は生まれてすぐ赤ん坊のときに捨てられた」ということにしたがるのが指摘される。さらには第14章「仲間意識を持たれ過ぎてヘヴィ」、そして第16章「しょぼいと周縁化される?」まで。筆者は、こうしたことをアカデミックに立証したくて研究しているのだと自省させられる。独特の言い回しに賛否はあるだろうことをふまえて、社会的課題をこのように端的に表現してくれた本書に胸のすく思いである。

筆者が担当する授業で、ここ数年、本書を文献購読している。受講生の多くが英国について予備知識がなくても、本書を読み始めれば問題意識は共有できる。「格差」や「差別」に敏感な学生たちは、最初は戸惑いを見せつつも、具体的なテーマになればきわめて真摯に取り組んでくれている。日本における多様性の現状と英国のそれとは異なるものの、あらためて考えれば日本について気づくことはたくさんある。また本書で描かれているのが、よく知っている日本の事情ではないからこそ、受講生が率直な「疑問」や「違和感」を覚えてそれを表明することにつながりやすいところが、教材として有用である。

本書は「ノンフィクション」と位置づけられている。ただどこまでそのように把握できるかどうかは留意したい。例えば保育士時代のエピソードなどは、当然に守秘義務があるだろう。筆者は本書を、著者の実体験を元に再構成したものにとらえている。また学術書ではない以上、英国の教育制度についての一般的な理解の仕方とは異なるかもしれない。加えて著者の文章にも、PC（ポリティカルコレクトネス）に反すると判断できる表現は散見される。不快に感じる読者がいるのも当然だろう。そうした留意事項を踏まえた上で、本書をきわめて問題提起的な文献としてとらえたい。

画一的な「正解主義」とはできるだけ距離をとりたい。権力が個人の権利を侵害する状況を見過ごせない。いかなる理由でも決して他者を見下したりしたくない。年を重ねても立ち止まらず柔軟でありたい。「なぜ教育を研究するのか」をあらためて自覚させてくれた本書に、感謝の意を表したい。